

令和6年度 府中町立府中南小学校 学校自己評価表

学校教育目標	自分が学ぶ みんなと学ぶ かしこく やさしく たくましく	経営理念 ミッション・ ビジョン	「共育」子ども大人も共に育つ学校・家庭・地域 1 共に学ぶ子ども…自ら学ぶ子・自分や友達を大切にする子・根気強くチャレンジする子 2 共に育つ教職員…子どもと共に自ら育つ教職員・出会いを大切にする教職員 3 地域と共に育つ学校…自分が好き 友達が好き（児童） 子どもと共に学び合おう（保護者）学校と共に子どもを育てよう（地域）
--------	---------------------------------	------------------------	--

ビジョン（中期経営目標）実現に向けての現状（進捗状況）と今年度の位置付け	不登校や発達に課題のある児童の実態から、組織的な生徒指導体制の推進を図ると共に、学校とは「学びを通して人をつなぎ共に育つ場である」ことを家庭・地域と再確認しつつ、「命の教育」を中心として各部の取組を横断的につなげ、充実させていく。
--------------------------------------	---

評価計画（中期経営目標を設定して1年目）

A 中期（3年間）経営目標	B 短期（今年度）経営目標	C 目標達成のための方策	D 評価指標	目標値（%）	E 評価結果			
					（ 1 0 ）月		（ 2 ）月	
					達成値	評価	達成値	評価
a 主体的に学び続ける児童の育成	・自ら課題を見つけ、解決しようとする児童の育成	・主体的な学びを促すための「自己内対話」と「評言」を取り入れた授業づくり ・新たな議題を見つけるための「振り返り」の充実 ・基礎学力の定着	自己内対話・評言を取り入れ、新たな課題発見につながる振り返りを意識した授業に取り組む教師	90%以上	70.8%	B	90.9%	A
			自分の考えと比べながら聞いたり考えたりして振り返りを書けた児童	80%以上	87.7%	A	80.3%	A
			算数科の単元末テストで、正答率70%以上の児童	80%以上	85.0%	A	84.9%	A
b 読書活動の推進・充実	・自分で読みたい本を選んで読書しようとする児童の育成	・読書祭りを中心とした強化月間の設定（委員会活動とのコラボレーション） ・教科と関連した並行読書の推進 ・読書活動を取り入れた単元づくり ・リブロカードの効果的活用	自分で読みたい本を選んで読書ができる児童	80%以上	91.4%	A	89.5%	A
c 生徒指導体制の確立	・教職員による統一した指導（当たり前の文化） ・お互いの違いを認め合い、お互いを大切にする児童の育成	・SSTの実施 ・異年齢や同年齢集団による協調的な関わりの場の設定（質の向上） ・各学年の取組、成果を共有する場の設定（意識の向上）	「たてわりで遊んだり活動したりするのは楽しい」と答えた児童	80%以上	91.1%	A	94.2%	A
			「同学年の仲間と学んだり、一緒に何か活動したりするのは楽しい」と答えた児童	80%以上	95.7%	A	94.9%	A
d 体づくりの推進・充実	・運動意欲の向上 ・食育の充実	・児童の運動に対する意欲、興味関心向上の取組（委員会活動とのコラボレーション） ・「食べることの大切さ」を理解する授業の実施 ・給食試食会の協働実施（委員会活動のPTA とのコラボレーション）	体を動かすことは楽しいと感じる児童	85%以上	90.3%	A	88.9%	A
			バランスの良い食事を心がける児童	85%以上	89.9%	A	90.8%	A
e 信頼される学校づくり（コミュニティ・スクール）の推進・充実	・「共育」活動の充実	・サポーター活動の発信、充実 ・地域と教職員の協働した取組の推進（委員会活動とのコラボレーション）（授業や放課後学習支援） ・CS に関する職員研修の実施（CS 事務局やサポーターとのコラボレーション） ・働き方改革の推進（会議の効率的な運営）（業務のスクラップ&ビルド） ・子どもと向き合う時間の確保（日課表の変更）（ノー宿題デー）（授業時数短縮）	教育活動の満足度（児童・保護者）	90%以上	88.6% 95.7%	A	89.5% 94.5%	A
			「子どもと向き合う時間の確保ができています」と答えた教職員	80%以上	72.2%	B	84.2%	A

評価基準…A：目標達成（95%～100%）B：おおむね達成（80%～94%）C：もう少し（60%～79%）D：できていない（59%以下）
目標値を100%として、達成率を計算する。「例 目標値85%→アンケート結果92% →目標値を超えているので評価はA」

F 結果の分析・解釈（中間 10月） ○…成果 △…課題 ★…下半期の改善方策				
＜a 主体的に学び続ける児童の育成＞ ○全体研修による理論研修や研究授業などを通じて研究の方向性について校内全体で共通認識を図ることができた。 △「①自己内対話・評言を取り入れ、新たな課題発見につながる振り返りを意識した授業に取り組組んでいる。」という質問に対する肯定的な回答は71.0%であり、教職員は目標に対して下回る結果となった。 ★全体研修・ブロック研修での授業研究を通じて、研究の方向性の共通認識を深める。 ○「自分の考えと比べながら、聞いたり考えたりして振り返りを書けたか」という質問に対する肯定的な回答をした児童は87.7%という結果が出ており、他者の考えに耳を傾けることができる児童が非常に多かったことは成果といえる。 △低学年に関しては、アンケート内容の意味が分からずに答えているのではないかという懸念がある。中・高学年では振り返りの内容について具体的なモデルを提示するとともに、指導内容に応じて、教師側が具体的なモデルを持っておく必要がある。 ★自分の考えを持つ場、友達の考えをしっかりと聞く場、自分の考えを伝える場を授業の中で意識的に設定することで、振り返りの質を高める。 ★単元を通して、つけたい力を意識した振り返りのモデルを考える。	＜b 読書活動の推進・充実＞ ○肯定的評価が多い。 ○図書委員会の活動が効果的だった。 →読書ビンゴの景品「三冊借りられる」が人気。 ○並行読書で教科書とのつながりが大きくなっている。 ○委員会の児童が声をかけることで、図書室に行く機会になった。 ○児童会執行部の活動（平和展）とのコラボが有効であった。（読み聞かせ、平和の本に関心） ○読み聞かせの時間を楽しむ児童が多く、読み聞かせサポーターの方の支えが大きいと感じる。 △図書室が遠い学年は利用しにくい。 △図書の時間を作れなかった。 △個人差があり、全体には広がらない。 △量もだが質も必要。 △指標の評価がA 評価なので、レベルを上げるなど目標を新たに設ける必要がある。 △学校教育目標をどうつながっているのかを考えていく必要がある。（本を読むことで、どんな力を付けようとしているのか） ★引き続き図書委員会の活動の充実を図る。（2学期…読書まつり） ★図書委員だけでなく、教員も読書活動を充実させるために声をかけたり、リブロカードの活用をしたりしていく。 ★学校教育目標とのつながりを考え、リブロカードの内容や評価指標のA 評価を維持できるように考えていきたい。（どのようにするか、具体的に考えていく。）	＜c 生徒指導体制の確立＞ 【全体】 ○教職員が共通理解のもと、統一した指導を展開しているため、各評価項目を大きく達成している。 【異年齢による協調的な関わり】 ○年度当初よりきょうだい学年によるたてわり掃除を計画的に行い、共に活動することで関係性を深めている。上学年の姿が下学年の手本となり、上学年にとっては自覚につながっている。 ○執行部を中心に児童が主体となって、たてわり遊びや平和集会を計画・運営してことで活動が充実した。 △行事や学習の成果として、学年間で交流する機会を増やしていき、憧れや自覚につなげていきたい。 ★引き続き執行部を中心にしながら、児童主体の活動を計画的に進めるとともに、活動の目的を児童も教職員も明確にして活動を展開していく。 【同学年による協調的な関わり】 ○学校教育目標を受けて学年目標や学級目標などを設定して、児童の目指す方向性を明確にすることで、各活動が深まっている。 ○行事や総合的な学習の時間などを中心に、クラスを超えて学年間で交流を深めることで、活動が深まり、楽しさにつながっている。 ★各学年の取り組みに留めるのではなく、学校全体の取り組みに広げていきたい。	＜d 体づくりの推進・充実＞ ①運動意欲の向上 ○運動会や水泳、体力テスト等楽しく取り組める学習内容が続いた △当てはまらない児童が60名近くいる。全員の受容は難しいものの、「あまりあてはまらない」児童を「まあまあ当てはまる」児童へと引き上げる手立てを用意する。 ★運動に対する意欲を向上させるよう、体育委員会の活動を中心に呼びかけていく。その際、どの運動遊びなら外に出たくなるかアンケートを実施する。（運動チャレンジ、南小サーキット等） △外遊びに行かない児童は、友達との関わりが持ちにくいのではないかと。 ★行動観察をして声をかけたり、学級レクを仕組んだりしてみんなと外に出る機会を設ける。 ②食育の充実 △昨年同時期に比べて、数値が下がっている。「食べ切った」結果を見取るのではなく、「食のバランス」に対する意欲を見取るべきだった。 ★委員会活動の推進や、食育・給食指導を充実させることで向上を図る。 ★減らしていることに負い目を感じる児童がいるのではないかと考える。自分に合わせた量を食べることにに対して肯定的な評価をしていく。 △アンケートの文言を分かりやすく書き換えたつもりが、意図が伝わらず、減らした児童が否定的な回答を選んだのではないかと考える。 ★アンケートの文言を、一口メモ等にもある「バランスのよい食事を心がけている。」という内容に変えていく。	＜e 信頼される学校づくり＞ 【教育活動の満足度】 ○PTA総会で、サポーター活動についてコミュニティ事務局の方が説明。働く保護者が増え、サポーターに限られた人になってきているため、今後の世代交代も鑑み、年度初めにサポーターの新規募集を行った。 ○参観日や運動会では人数制限や時間での交代なく参観してもらった。工夫しながら保護者の希望を取り入れるようにした。 ○HPの頻繁な更新や学校だよりで、「共育」活動の発信を意識した。 △「学校に来るのは楽しい」と回答した児童が88.6%だった。（昨年同時期91.5%） 個々への面談や年5回行っているいじめアンケートでも同じ項目があるので、実態を掴んでいく。 △保護者アンケートの「保護者、南っこサポーターとして、教育活動に積極的に参加したい」という項目の否定的回答が26.2%あった（昨年同時期22.3%）。また、プール指導サポーターを新たに募集したが、人数は少なかった。 △「教育活動に積極的に参加する」ことに否定的な保護者が、参加してよかったと感じるためにはどうすればよいか、学校内だけでなく、サポーターさんやPTA役員さんなどと探っていく必要がある。 ★学校だよりやHPで取組の様子を伝えることのより「共育」を目指す。 ★コミュニティ・スクールや地域学校協働活動についての教職員研修を行い、理解を深める。 【働き方改革】 △「子供と向き合う時間の確保ができています」と回答した職員は72.2%と、昨年同時期を2.8%下回った。原因としては、子供と向き合う時間について理解できていないこと、多忙感により業務に充実感が持てないことなどが考えられる。 ★今一度、「子供と向き合う時間」について確認したり、なぜ確保できていると感じられないのかについて話し合ったりすることにより、タイムマネジメントを目指す。

F 結果の分析・解釈（最終 2月） ○…成果 △…課題 ★…来年度に向けた改善方策				
<a主体的に学ぶ続ける児童の育成> ○各学年によるブロック研修や全体研修での研究授業や研究協議を行うことで、「①自己内対話・評言を取り入れ、新たな課題発見につながる振り返りを意識した授業に取り組んでいる。」という質問に対する肯定的な回答は71.0%から90.9%に向上し、校内の先生方の研究に対する意識は上がったと考えられる。 △全体的な意識の向上はみられるが、児童の振り返りの変容を見取るための手段が確立していなかったため、研究に対するフィードバックが難しかった。 ★先生方や児童に対する具体的なフィードバックの手段の検討が必要である。 △「友達の意見や考えを、自分の考えと比べながら聞いたり考えたりして振り返りを書いている」という質問に対して、前は87.7%と高い数値を示していたが、最終アンケート結果は80.3%に数値が下がっていた。結果から考察すると、今年度当初のアンケートにおける、「友達の意見や考えを、自分の考えと比べながら聞いたり考えたりして振り返りを書く」ということに対する児童の認識が浅くあいまいであったとも考えられる。2学期に入ってから、各学年ともブロック研修や全体研修を通して本格的に振り返りを意識した授業研究に取り組んでいる。そのなかで、児童に対して「他者の意見や考えを反映させた振り返りができているか」という問いは、振り返りの質が深まっている子どもたちにとって、肯定的な回答の減少につながったのではないかと考えられる。 ★今後は目指す子どもに像を意識した振り返りが書けるよう、振り返りを記述する子どもたちの語彙力を育成し、目指す子ども像に子どもたちを導く「評言」を意識した、さらなる授業改善を行う。 ○算数科の単元末テストで、正答率70%以上の児童数は年度当初と同様の約85%で推移している。南っ子タイムにおける計算タイムによる目に見える数値の変化は見られなかったものの、各学年の児童の様子の聞き取りから、児童の計算力の底上げにつながっていることは確かである。 ★今後も低学年段階からの基礎的学力を向上させ、児童全体の学力向上を目指した計算タイムの継続を行っていく。	<b読書活動の推進・充実> ○肯定的評価は89.5%と高いが、前期(91.4%)と比べるとやや下がっている。 ○図書委員会がリプロカードの記入を呼びかける放送を行ったり、リプロカード内の「おすすめの本」を放送で紹介したりすることで、より読書に親しもうとする姿が見られた。 ○11月に行われた図書祭りで、ビブリオバトルに取り組み、低学年は国語科の学習とリンクさせ、お気に入りの本のあらすじや好きなところをまとめて紹介するという活動につながった。 ○各学年で国語科・総合的な学習の時間・生活科などで図鑑等の図書を活用したり、物語の並行読書を行ったりした。 ○読書活動を取り入れた単元づくりを行った。 △読書の質を見取ることが難しかった。 ★目標は達成できているので、引き続き生活の中に読書活動を取り入れられる活動を継続していきたい。 ★図書委員会を中心に、児童が図書室や読書が身近に感じられる活動を考えていく。 ★学校教育目標と照らし合わせて、どういう児童を育てたいか・何のための読書活動なのかを教職員が共通認識する必要がある。	<c生徒指導体制の確立> 【全体】 ○各活動や取り組みの目的を教職員、児童で共通認識を進めていくことで、深まりにつながっている。そのことが、同学年・異学年による活動の充実感につながっている。 ○担当教員が、計画的に準備・運営を行うと共に、部の教職員が連携することが、各評価項目で目標を大きく達成することにつながった。 ★大きく目標を達成できているので、取り組みを継続するとともに同学年・異学年交流を広げていく。 【異年齢による協調的な関わり】 ○異学年で掃除に取り組むことで、上学年はリーダーとしての自覚、下学年はあこがれにつながっている。また、異学年と関わることで思いやりなどの心情を養うことにもつながっている。 ○執行部、6年生が中心になり、「たてわり遊び」や「なわとびチャレンジ」などの取り組みを計画・運営することで、子どもたちが主体的に取り組むことにつながった。 △異学年での授業の内容や成果物の交流が、できなかった。 ★カリキュラム・マネジメントを行う際に、学習内容などの異学年交流を計画的に取り入れていく。 ★引き続き執行部を中心にしながら、児童主体の活動を計画的に進めるとともに、活動の目的を児童も教職員も明確にして活動を展開していく。 【同学年による協調的な関わり】 ○各学年で行事に向けて実行委員を立てたり、行事の目的を確認して児童主体で展開したりすることで、大きな成長や達成感を得ることにつながった。 ○各教科や総合的な学習の時間などで、学級の枠を超えて成果物を交流したり、学習を進めたりしたことで、一人ずつの持っているよさなどについて理解を深めることにつながった。 ★学級遊びだけではなく、学年オリジナルのイベントや休憩時間の遊びなどを児童が中心になりながら、展開していく。	<d体づくりの推進・充実> ① 運動意欲の向上 肯定的評価は88.9%と高いが、前期(90.3%)と比べるとやや下がっている ○数値の改善は見られなかったものの、運動しにくい環境を考慮すると一定の成果は見られた。冬季の持久走や縄跳びという苦手意識を感じやすい種目の中で、楽しいと感じる児童が90%いるのは成果である。 ★委員会活動と連携しての朝会で(縄跳び・持久走)を全校で実施した。その結果、外遊びに抵抗があった児童も外で練習や遊びに取り組むことができ、数値を維持する結果につながった。 △上半期の目標は、あまり当てはまらない児童を、まあまあ当てはまる児童に引き上げる、だったが、数値はあまり変わらなかった。引き続き「あまりあてはまらない」児童を「まあまあ当てはまる」児童へと引き上げる手立てを用意する。 ★ロング昼休憩(掃除をなくして全員が外に出る時間をつくる)や、引き続き運動チャレンジを行い、外に出たくない児童の外に出ることへの敷居を下げる手立てをとりたい。 ② 食育の充実 肯定的評価は90.8%となり、前期(89.9%)をやや上回った ○発達段階に合わせて実施した食育の指導が、児童の間に浸透してきている。 ○残食率が2.45%から1.65%に減った。特に低学年の偏食に改善傾向が見られる。 △バランスの良い食生活を心がけてはいるが、実際には増やしすぎたり減らしすぎたりしている児童や、苦手だと思い込んで、食べない児童が見られる。 ★給食指導時に、「減らしすぎない」「まずは一口食べてみる」等の担任の声掛けや、減らしたら他を増やせないシステムの見直しをする。配膳を均等にすることで残食を減らし、一人ずつが適量を食べることにつなげる。 ★引き続き給食時間のひとロメモを活用しバランスの良い食事を意識づける。	<e信頼される学校づくり> 【教育活動の満足度】 ○12月にCSに関する校内研修を行い、CSの意義や本校の特徴などを確認した。サポーター6名にも参加していただき、児童の実態や育てたい子ども像について話し合うことができた。サポーターと教職員の距離が縮まり、学習支援に入ってもらったことが増えたり児童の様子について交流したりできるようになってきた。 ○南っ子フェスやとんどまつりなど、保護者やCSの方が子どもたちを楽しめるために連携している姿は、児童に好影響を与えている。 ○学習支援や図書・掲示・植栽などの環境を整えていただくことで、児童が安心して学校生活を送ることができている。 ★PTAやCSの活動について、参加者が広がるよう、学校だより等で活動の様子や魅力を発信していく。 【働き方改革】 ○校内研修で、「子どもと向き合う時間」の定義について確認したことで、肯定的回答が上昇している。 ○教師でなくてもよい仕事をSSSやサポーターに担ってもらうことで、教師の本来の業務に集中することができていることを実感している。 ○今年度、時程を見直したことで、放課後の業務時間を確保することができている。 △スクラップ&ビルドについての肯定的回答が低い。 ★定義は理解したもの、多忙感から充実感がもてず、肯定的評価ではあるものの回答の選択肢が低くなったものもある。引き続き業務改善は意識し続ける必要がある。 ★教員としての本来業務を意識しながら、スクラップ&ビルドについて協議していく。「向き合えていない」と感じる時間や業務は何なのかを出し合うことで、それをスクラップ&ビルドにつなげていく。
<学校の大きな方向性に照らして> コミュニティ・スクールの推進・充実を基盤とした「共育」の理念のもと、「命の教育」の充実と組織的な生徒指導体制を図った。「自分が学ぶ みんなと学ぶ」という学校教育目標を意識した各部の取組を横断的につなげることは、教育活動の一体化につながり、児童の育成に効果的であったと考える。				
<学校運営協議会委員による評価> ・目標、方策、設定の適切さ (A) ・評価（結果）の適切さ (A) ・分析、解釈の適切さ (A) ・改善方策の適切さ (A) → 総合評価 (A)				

学校関係者評価を受けての改善方策（修正）
<学校の大きな方向性に照らして> 今年度の学校自己評価に対して、学校運営協議会委員からは全体をとおして「A：適切である」との評価であった。学校教育目標を達成するために「命の教育」を中心として各分掌部の取組を横断的にリンクさせながら取り組んだことが成果につながったと考える。一方、主体的な学びを促すための工夫した授業づくりや振り返りの内容及びその見取り方の確立、さらに、不登校児童の減少を目的とした組織的な生徒指導体制のさらなる充実などの課題に対し、来年度重点的に取り組む必要がある。 また、本校のコミュニティ・スクール運営やサポーター活動は、地域や保護者が主体的かつ組織的に動いてもらっていることが大きな強みである。その輪がさらに広がるよう学校としても工夫した連携協働を行い、これまで取り組んできた「命の教育」をさらに充実させ、次年度も学校教育目標の実現と「共育（共に育つ）」の具現化を目指す。